

第21回 BELCA 賞決定

BELCAでは、このたび第21回BELCA賞の表彰式(10件)を以下の通り決定いたしましたので、お知らせいたします。

なお、表彰式は来る平成24年5月15日(火)16時より、東京都中央区日本橋蛸殻町のロイヤルパークホテルにて開催いたします。

第21回 BELCA賞表彰建物(順不同・受賞者名等は今後変更されることもあります)

ロングライフ部門

建物名	所在地	竣工年 (改修年)	用途	受賞者			
				所有者	設計者	施工者	維持管理者
ザ・プリンス箱根本館	神奈川県足柄下郡箱根町元箱根144	1978 (2007)	ホテル	㈱プリンスホテル	村野藤吾 ㈱松田平田設計(改修)	清水建設㈱ 高砂熟学工業㈱ ㈱関電工 ㈱西原衛生工業所 日本オーチス・エレベータ㈱ ㈱川島織物セルコン	㈱プリンスホテル
阪神甲子園球場	兵庫県西宮市甲子園町1-82	1924 (2006 、 2009)	観覧場(野球場)	阪神電気鉄道㈱	㈱大林組	㈱大林組	阪神電気鉄道㈱
早稲田大学2号館	東京都新宿区西早稲田1-6-1	1925	大学 (図書館、博物館)	学校法人 早稲田大学	内藤多伸、今井兼次、桐山均一、西谷章(改修)、古谷誠章(改修)、大成建設㈱一級建築士事務所(改修)	上遠組 大成建設㈱東京支店(改修)	学校法人 早稲田大学

ベストリフォーム部門

建物名	所在地	竣工年	改修年	用途		所有者	受賞者	
				改修前	改修後		改修設計者	改修施工者
石川県政記念しいのき迎賓館	石川県金沢市広坂2-1-1	1924	2010	県庁舎	複合文化交流施設 (ギャラリー、セミナー室、レストラン、事務所等)	石川県	㈱山下設計	大成建設㈱ 兼六建設㈱、(㈱岡組 成瀬電気工事㈱ 立野電気工事㈱ ㈱柿本商会 みなみ設備工業㈱ 鈴木管工業㈱ ホクレイ㈱ 三精輸送機㈱
国立大学法人東京工業大学すずかけ台キャンパスG3棟	神奈川県横浜市緑区長津田町4259	1979	2010	講義・研究室棟	講義・研究室棟	国立大学法人 東京工業大学	国立大学法人 東京工業大学 ㈱綜企画設計 ㈱テクノ工場	(㈱)浅沼組 ㈱柿本商会 ㈱積田電業社
芝学園 講堂	東京都港区芝公園3-5-37	1966	2010	学校(講堂)	学校(講堂)	学校法人 芝学園	清水建設㈱一級建築士事務所	清水建設㈱ ㈱関電工 大成温調㈱
鶴岡まちなかキネマ	山形県鶴岡市山王町13-36	1932 、 1936	2010	絹織物工場	映画館	㈱まちづくり鶴岡	(㈱)設計・計画高谷時彦事務所 (有)安芸構造計画事務所	(㈱)佐藤工務 鶴岡建設㈱ (㈱)マルゴ (㈱)渡会電気土木 山形空調㈱
南海ターミナルビル	大阪府大阪市中央区難波5-1-60	1932	2009	複合施設 (駅舎・物販店舗・ホテル等)	複合施設 (駅舎・物販店舗・ホテル等)	南海電気鉄道㈱ ㈱高島屋	(㈱)プランテック総合計画事務所 ㈱竹中工務店 ㈱大林組	㈱竹中工務店 ㈱銭高組、(㈱)大林組 南海辰村建設㈱ 南海ビルサービス㈱
福岡パルコ	福岡市中央区天神2-11-1	1936	2010	百貨店	物販店舗	学校法人 都築学園 (㈱)パルコ	(㈱)竹中工務店 (㈱)パルコ	(㈱)竹中工務店
ローム 京都駅前ビル	京都府京都市下京区塩小路通烏丸西入ル東塩小路町579-32	1977	2010	テナントオフィス	自社オフィス	ローム㈱	(㈱)竹中工務店	(㈱)竹中工務店

BELCA賞の概要

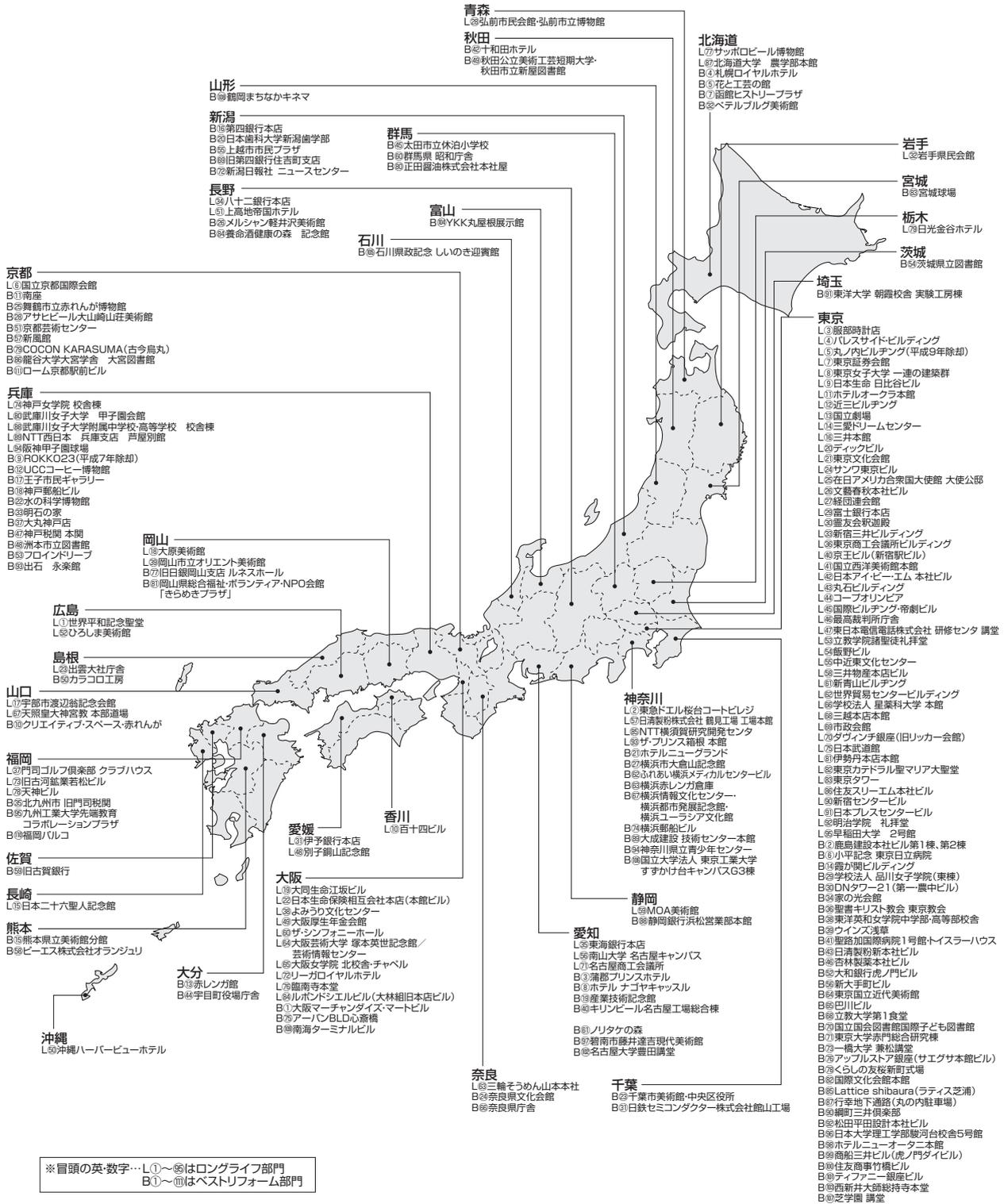
- 目的** 良好な建築ストック、つまり社会の中で生き生きと活用される建築の形成に寄与することを目的に設けられた表彰制度です。賞を2部門に分け、周到的な長期計画で、安定した維持保全を継続しているものをロングライフ部門、巧みな改修によって既存建築物を活性化し、現代社会に蘇生させたものをベストリフォーム部門と定めています。
- 受賞件数** 今回を含め、これまでロングライフ部門95件、ベストリフォーム部門111件、合計206件がBELCA賞を受賞しました。(次ページの地図参照)
- 要件** ロングライフ部門は長年にわたり適切な維持保全が実施され、建築後30年以上経過した建築物のうち特に優秀なものを表彰し、ベストリフォーム部門は最近改修され、その改修により画期的な活性化が図られ、改修後1年以上を経過した建築物のうち特に優秀なものを表彰します。
- 選考** 賞の選考は、建築学界、建物所有、設計、建設、設備、メンテナンスといった多分野からなる「BELCA賞選考委員会」(委員長：内田 祥哉東京大学名誉教授)により行われました。
- 表彰式** 表彰式は来る平成24年5月15日(火)16時より、東京都中央区日本橋蛸殻町のロイヤルパークホテルで開催される予定です。
- 受賞者** 表彰式では、ロングライフ部門で建物所有者、設計者、施工者、維持管理者の4者、ベストリフォーム部門で建物所有者、改修設計者、改修施工者の3者が表彰されます。
なお、受賞物件には賞牌(文化勲章受章者 帖佐美行氏(故人)作)が贈呈されます。
- 次回募集** 回りの募集は平成24年5月下旬より7月初旬まで行う予定です。



第21回(平成23年度)BELCA賞選考委員会(順不同・敬称略)

- 委員長 内田 祥哉 (東京大学名誉教授)
- 副委員長 三井所清典 (㈱アルセッド建築研究所 代表取締役・芝浦工業大学名誉教授)
- 副委員長 鎌田 元康 (東京大学名誉教授)
- 委員 上田 博司 (㈱東急コミュニティー 取締役専務執行役員)
- 〃 唐沢 隆男 (㈱日立建設設計 常務取締役)
- 〃 北 泰幸 (㈱竹中工務店 常務執行役員)
- 〃 木場 一操 (㈱きんでん 技師長)
- 〃 杉山 直 (㈱大林組 取締役専務執行役員 東京本店長)
- 〃 千田 公男 (新菱冷熱工業㈱ 常務取締役 首都圏事業本部副本部長)
- 〃 村尾 幸彦 (エヌ・ティ・ティ都市開発㈱ ビル事業本部 PM事業部長)
- 〃 森 暢郎 (㈱山下設計 特別顧問)

BELCA賞分布地図



第21回 BELCA賞選考総評

BELCA賞選考委員会 委員長 内田 祥哉

BELCA賞は、良好な建築ストック、つまり社会の中で生き生きと活用される建築の形成に寄与することを目的に設けられた賞である。賞を2部門に分け、周到な長期計画で、安定した維持保全を継続しているものをロングライフ、活用に翳りの見えてきた建物を、巧みな改修によって現代社会に蘇生させたものをベストリフォームとし、平成3年から前回まで計20回、表彰件数は196件を数えている。

ロングライフ部門では所有者、設計者、施工者、維持管理者の4者を、ベストリフォーム部門では所有者、改修の設計者、施工者の3者を表彰している。昨今の地球環境問題にともなう建築物の長期利用の気運を背景に、BELCA賞への関心は年々高まりつつあるが、現代社会の中で活躍するためには、ロングライフ部門でも、熱源、照明、給排水、空調など諸設備の抜本的改造が必要となっている。他方ベストリフォーム部門でも、建物の歴史的経験を保存する傾向が増しているため、近年は両部門を区別しないで合わせて10件を選考している。その結果、本年はたまたま、ロングライフ部門3件、ベストリフォーム部門7件を表彰することとなった。

今回表彰されるロングライフ部門には、名作の声高いリゾートホテル、球史にとって欠くことの出来ない野球場、新築当時の姿を損なわない耐震補強に成功した大学図書館が選に残った。

ベストリフォーム部門では、地域の貴重な歴史遺産として保存されていた煉瓦造の県庁舎、これまでにない耐震補強の考え方で容姿を一新させた大学研究室、地道で配慮の行き届いた改修で見事に蘇生した講堂、映画館への転用で地域の活性化を担う絹織物工場、逐次増築で非効率化していた交通拠点を実行法規の中で一体化した巨大な複合施設、中心市街の賑わいを取り戻した商業施設、テナントビルを自社ビルに改造し企業イメージをファサードに表現した駅前ビルと、以上選に残った物件を見ると、いずれも名実ともに、建築の寿命を延ばすための手法が社会に定着しつつあることを実感させる。

選考委員会を顧みると、本年の応募案件は昨年にも増して優れた物件が多く、委員のあいだでは早くから選考の難しさがいわれていた。応募条件への適合性についても厳密に確認したため、残念ながら選に漏れた物件もあったが、それらについては条件の整備を待って、再度の応募を期待したい。此の分野の技術はますます多角的に展開されていくので、応募作品の水準も年ごとに高まることが予想される。

回を重ねるにつれ、BELCA賞も周知の範囲を広めつつあるが、今回新たに石川県と山形県からの受賞があった。建物の維持保全技術の全国的な普及向上を目指す賞の趣旨から、未入選の地域からの応募を切に期待したい。

第21回 BELCA賞ロングライフ部門選考講評

BELCA賞選考委員会 副委員長 三井所 清典

BELCA賞における建築のロングライフの概念はますます広まってきた。審査会では意識的に明確な規定をせず、応募者の意図を尊重することになっている。ロングライフを長寿命という言葉に置き換えるなら、その有様は多様である。建築をできるだけ創建当時の状態で維持することは概念として分かり易い。ただ時間の推移の中で形成される建築の雰囲気は時々状態で高い価値を見出すことができるので、風雪を刻み続ける建築の長寿命を計ることも意味がある。今回は殆ど全体に亘るリニューアルを行い機能や性能の向上を図った建築が長寿命部門に応募された。全面的に変化しているものを見る人には全く以前の建築と同じイメージに映るものでイメージの長寿命化ともいえるべき建築である。また近年は耐震診断や必要な耐震補強がなされていない建築は受賞の対象にはなりにくい。応募は何回も可能なので然るべき検討や改修を済まして再度の挑戦を期待したい。

「ザ・プリンス箱根本館」(1978年竣工)は景勝地箱根芦ノ湖畔の自然環境の中に佇むリゾートホテルである。このホテルの特質は設計者村野藤吾が目指した設計の考え方とその思想を守った2007年の大改修の方針に裏付けられる。村野は湖畔の環境と景観の保全に徹する目的から「一木一石たりとも大切に保存し、みだりに変更してはならない」ことを設計の原則とし、工事中もこれを守らせた。具体的には、ホテルの建築を分割し、巨大化を避け、2棟の円形客室棟を樹林の中の空地に分散配置し、エントランスやメインロビーのある中央棟も同様に樹間に建設されている。しかもそれらの建築はすべて周辺の松や杉の樹高を超えないように建てられ、ホテル全体がそれぞれ樹林に包まれ湖畔の景観に調和する建築となっている。またそのことによって建築の内外が自然と融合した魅力的な空間が生み出されている。2007年に実施された大改修の方針は内外共に村野の設計思想を受け継ぎ美しいデザインとディテールを保存し、竣工当時の姿に修復することであった。特に共用部はそれが徹底されている。職人の巧みの技を把握するため実測調査をするなどの努力によって改修を実施した成果はロングライフ部門に値するものと高く評価された。

「阪神甲子園球場」(1924年竣工)は日本で初めての本格的な野球場として西宮に建設され、以来旧制中等学校、引き続き現在の全国高等学校野球の聖地となっている。またプロ野球チーム阪神タイガースのフランチャイズ球場としても歴史を刻み、国民に深く親しまれている球場である。今回野球場としての現代的魅力と施設の安全を向上させるため、2007年から2010年にかけて大改修・大改装が実施され、施設の機能的及び物理的長寿命化が図られた。改修は内野・外野のスタンドの床や客席の改良、内野席上部の銀傘架け替えによる屋根の拡張と中間支柱の撤去、ツタの絡んでいたRC外周壁の増打による新しいファサードのデザイン、耐震補強や避難計画の総合的見直し、売店や食堂、甲子園歴史館等、外周のオープンな場に設けられた記念碑を含むアメニティ施設の充実が図られている。銀傘上の太陽光発電設備など設備上の省エネ対策も施されている。実に立派なりニューアルであるが、不思議なことに以前からそうであったかの様に見える。見る人にとって「あるべき甲子園の姿」として映るのであろうか、見事なイメージ保存による長寿命化として高く評価される。

「早稲田大学2号館」(1925年竣工)は早稲田大学図書館として建設された建物である。当時建築学科主任教授内藤多仲が中心となり、意匠は30歳の助教授 今井兼次が担当した。意匠性に富む6本の円柱のあるエントランスホールと天井の高い500人収容の大閲覧室のある図書館は大正末に東洋一と言われたという。その後1955年に自習室や事務室の新館ゾーンと書庫ゾーンが増築され、1990年には中央図書館機能が移転した。1997年のキャンパス整備指針でこの3つのゾーンが一体化した建築は大学の歴史を継承していく軸路に接し、内外部とも最大限保存すべきという改修方針が定められている。2号館の保存改修は1998年と2010年の2回に亘る改修で見事に応えたと評価される。1998年の改修で大隈記念室と會津八一記念博物館の新機能が加えられ、1999年東京都歴史的建造物第1号に選定された。2010年の改修では3ゾーンを一体とした建築の耐震補強が行われたが、補強は新館ゾーンと書庫ゾーンに限定し、初期の図書館ゾーンは歴史的意匠性が尊重された質の高い空間として保存された。このような全学からの期待に応えた建築の長寿命化の改修設計と工事が、ロングライフ部門に値すると高く評価された。

第21回 BELCA賞ベストリフォーム部門選考講評

BELCA賞選考委員会 副委員長 鎌田 元康

本年度のBELCA賞の応募物件数は、昨年度に比べロングライフ部門で微増、ベストリフォーム部門で微減、全体で微減であった。その中であって、今回のベストリフォーム部門表彰物件数は、昨年度より1件増え、7件となった。表彰に値すると評価された7件は、例年通りの激戦を勝ち抜いた物件だけに、それぞれ極めて優れたリフォームであり、改修内容も以下の物件ごとの概要に示すように、近年になく多岐にわたったものであった。その詳細を記すのに部門選考講評に許された字数はあまりに少なく、詳細については、この後に示される物件ごとの選考評をご覧いただきたい。

「石川県政記念 しいのき迎賓館」(1924年竣工、2010年改修)は、旧県庁本館(日本建築学界が保存要望)と「堂形のシイノキ」(国の天然記念物)の一体保存と県庁跡地利用により中心市街地の活性化を図ることを目的とした事業である。歴史的な価値の高い旧本館の正面部分は、レトロフィット免震の採用と鉄骨や炭素繊維による構造補強を施して残し、増築部分は保存部分の対比としてガラス主体の極めて透明性の高い現代建築とし、芝生広場から旧庁舎壁面を透けて見せるなどの工夫がなされている。丁寧な内装保存がなされた保存部分と、明るく開放的な増築部分が見事に調和していることに、現地審査を行った委員全員が感心させられた物件であり、かつ、省エネルギー面での工夫、平面計画が適切になされている。

「国立大学法人 東京工業大学すずかけ台キャンパスG3棟」(1979年竣工、2010年改修)は、1970年代後半から実質的運用を開始したキャンパスにある高層研究棟のうち1棟のリフォームである。当該建物は、オフィス空間相互を、3mセットバックした縦シャフトで連結するという明快な構成となっているが、このセットバックした5m幅の空間前面に、下部ピン接合の非自立型でプレストレスを導入された「ロッキング壁柱」を、既存建物に吸収ダンパーを介して寄り添わせ、地震時における変形を特定階に集中させることなくコントロールする手法を開発・採用し、また、壁柱後方にできたボイド状空間に個別空調の室外機を設置し美観を向上させた点、および設備改修なども適切である点が評価された。

「芝学園 講堂」(1966年竣工、2010年改修)は、創建当時より学園の講堂としての利用に留まらず、地域住民に開放され、映画鑑賞の場として親しまれ愛されてきた建物を、“新しい時代に従前と変わらぬ愛着を持って使い続けてもらうにはどうしたら良いか”の一点に向かって、学園・コンサルタント・建設会社が一体となり、考え抜き改修に取り組み成功させた物件である。冷房設備の新設、残響時間に配慮し設置した木質壁内側への空調ダクトの隠蔽と上下温度差を少なくするための工夫、男子校であるため不十分であった女子トイレの大幅増設、省エネ・省資源に配慮した設備機器の更新などが、平面・立面的に厳しい条件の中で行われていること、なによりも、学園関係者の建物への愛着と有効活用への熱意が評価された。

「鶴岡まちなかキネマ」(1936年竣工、2010年改修)は、鶴岡市中心地で昭和初期から続いていた絹織物工場の移転を契機として、その跡地利用に、鶴岡商工会議所加盟企業の出資による民間資本のまちづくり会社が事業主体となって取り組んだ、中心市街地活性化プロジェクトによる改修物件である。トップライトからの明かりを得て、絹織物工場の記憶を呼び起こさせる木造トラスが美しく表現されたエントランスホール、梁下高さを確保するために地盤を掘り下げて階段状スラブを新設し、内装・椅子などの工夫により温もりと雰囲気のある空間を創出している40席～165席の4つのシネマなどが評価されたが、これらは一次審査資料からは十分読み取れず、現地審査参加委員すべてが、書類による審査の限界を知らされた物件でもある。

「南海ターミナルビル」(1932年竣工、2009年改修)は、なんばの中核的役割を担いつつ増改築を繰り返し、機能や動線が複雑に錯綜する巨大複合施設となっていた当該ビルを、メインテナントである高島屋の“新本館計画(既存改修・新棟建設)”を契機として、全体を再構築・改修することにより街の活性化を指向したものである。“保存・再生・先進”のコンセプトのもと、歴史的景観としての北面外周部の補修・洗浄と乾式タイルへの貼り替えによる保存、中央に位置した“ロケット広場”の複数の庇の撤去と2本のマストに支えられたガラスキャノピーの大空間への改修など、多くの工事が適切に行われているが、各種大臣認定の取得や創意工夫により、快適な一体的適格建築に改修し得た点が特に高く評価された。

「福岡パルコ」(1936年竣工、2010年改修)は、旧岩田屋百貨店本館が全面的に一新された商業施設であり、老舗百貨店の近接地移転により、福岡の代表的な街角の灯が消えていたものを蘇らせ、新たな商業文化の創生の起爆剤となった物件といえる。今回の大規模改修の要点は、安全性、事業性、環境の3点であるが、既存構造体を利用した上での巧みな耐震改修、特別避難階段・非常用エレベーター新設、店舗構成配置や共用部デザインの一新に加えての既存エスカレーター設置部の改修、既存外壁に新たな外壁を付加してのデザイン一新と二重外壁を利用した熱負荷低減、隣接建物の設備との一体的利用を前提としたバリアフリー面での改修など、多様な改修工事が適切、かつ、巧みに行われていることが評価された。

「ローム京都駅前ビル」(1977年竣工、2010年改修)は、京都市内に本社を置く総合半導体メーカーが自社ビルとして取得した中規模の既存ビルを、“駅前都市景観への貢献”“環境負荷低減”“耐震性・快適性の向上”をテーマに、既存躯体を再利用し、仕上げと設備を全面更新することで新築同様に再生させたものである。塔屋一層を解体して近隣ビルとスカイラインを合わせ、京都の伝統である格子形状の太陽光追尾センサー付ブラインド内蔵ダブルスキンカーテンウォールに更新している。さらに屋上緑化・屋上壁面緑化、各種高効率機器の採用、雨水と空調用ドレイン水の利用、デマンド制御による最大使用電力制御など多様な省エネ・省資源手法を採用し、耐震補強や不要となった地下機械室の食堂への転用なども適切に行われているなど、ストックの再生に向けた努力が評価された。